

小学校における日本の伝統的な歌唱の授業プラン2

～ 題材名「こくごをうたう」の実践案～

A teaching music plan of Japanese traditional singing in the elementary school II

伊 野 義 博

Yoshihiro INO

I はじめに

学習指導要領の改訂において、「我が国の伝統音楽に対する理解を基盤として、我が国の音楽文化に愛着をもつとともに他国の音楽文化を尊重する態度等を養う観点から、各学校段階の特質に応じて、我が国や郷土の音楽の指導を一層充実してはどうか。」¹⁾といったことが、音楽科の改善の方向性として述べられている。音楽科教育における日本の伝統音楽や郷土の音楽の位置づけは、今後いっそう重視されることとなる。

こうした時代の要請もさることながら、そもそも日本の子どもの音楽教育がどうあるべきか、という根本的な問題が改めて問われるべきである。小泉は、伝統音楽を教育に取り入れるのは、子どもの「内側にある音楽的な本来の芽を発芽させ、育てる足がかりにする」ことであるべきと主張した。そして、そのために「小学校三年生までは、ほとんど伝統的なわらべうたの線に沿って教育」することを提案している²⁾。明治から続く日本の音楽教育の改善に向けての大胆かつ本質的な指摘である。

音楽教育の出発点を自国の音楽に求めた人として、ハンガリーのコダーイ・ゾルターンがいる。また、20世紀を代表するドイツの音楽教育家カール・オルフの教育理念も強く民族的な音楽文化を基盤としている。オルフの教育では「ことば」「音」「動き」が基礎的な要素として重視される。コダーイやオルフの教育方法は、日本においても紹介されたが、結局は音楽科教育において定着しなかった。形を真似ることはできても、自国の民族音楽や音楽文化に根ざすといった根本的な理念への理解や具体的な方法の開発がなされなかったことによる。

さて、「日本の子ども」とか「日本の伝統音楽・民俗音楽」といったことを煎じ詰めて考えた時、そこにはオルフと同様「ことば」、具体的には母語としての日本語が浮かび上がってくる。本稿は、この「ことば」に注目し、特に小学校低学年において、日本の音楽の伝統性や日本人の音楽的感性に直接的に結び付く音楽授業について、その視点と具体的なプランを提供する。小泉の言う、子どもの「内側にある音楽的な本来の芽を発芽」させる要因の一端がここにあると考えているからである。なお、本プランは、平成19年10月16日(内)新潟大学教育人間科学部附属長岡小学校1年2組において、題材名を「こくごをうたう～ことばに出して動いてみよう ふしぎとらたがとびだすよ～」として実践された。そのために、教員を対象とした学習指導案の形をとりながら「です、ます」調で書かれている。

II なぜ「ことば」か

音楽の授業なのに、なぜ「ことば」に注目するのか。それは、私たちが日常的に「ことば」を使用していること、そして「ことば」が音楽の創造や表現と結び付いていることによります。特にその多くが「声の音楽」である日本の伝統的な音楽においては、「ことば」は音楽の生成に直接的にかかわってきました。ことばの持つリズム、拍、抑揚、高低アクセント、フレーズ、響き、あるいはことばを発声する際の息の流れやエネルギー、身体的特性といったものが、日本的な特質をもった音楽を生み出す源となっています。

今回対象とする「ことば」とは日本語のことです。日本語を話し、日本の風土の中で育っている子どもは、日本語の持つ音楽的特徴を自然な状態で身に付けています。従って「ことば」が内包する音楽的特徴を捉え、吟味し、教材として子どもに示すことにより、彼らのもつ日本的な感性や音楽性はいつそう磨かれていくでしょう。そしてこの学習は、日本の伝統性に根ざした音楽を受け入れ、味わい、理解していくことに無理なくつながっていきます。従って、日本の音楽教育においては、もっと「ことば」すなわち日本語に注目し、幼少期から「ことば」と向き合った音楽の授業を大切に、その内容を体系化していく必要があると考えています。以下、「ことば」の持つ音楽的特徴とは何か、それは日本の伝統音楽とどのようにかかわっているのか、さらに、音楽の授業にどのように結び付けていくのかといったことについて、国語教材を例に述べていきます。

日本のこどもの「ことば」の学習が、日本人の言語活動の根幹をなす日本語（国語）の基礎から始まるのと同じように、日本のこどもの音楽学習も、日本の音楽の伝統性の根っここの部分から出発すべきだと思っています。

III 「こくご」教材のもつ音楽的特徴と日本の伝統音楽

私はここ数年、「日本の子どものための音楽プログラム」と題して音楽授業を継続してきました³⁾。これらの実践はすべて「ことば」と深く関係しています。しかし本実践が今までと異なるのは、直接的に「ことば」を学ぶ国語の教科書に注目していることです。今回の授業では、附属長岡小学校の1年生が使用している教科書『こくご…(上) かざぐるま』(宮地裕他著, 光村図書出版株式会社)を使用します。それではこの教科書で扱われている教材を、ことばすなわち日本語の音楽的特徴とかかわらせながら実践を想定し、具体的に見ていきましょう。なお、日本語の音楽的特徴として小泉は「ピッチ(高低)アクセント」「平らなイントネーション」「シラブルの等拍性」「強弱要素の希薄さ」をあげています⁴⁾。この点を参考にしながら、本稿では先に述べたように、ことばの持つリズム、拍、抑揚、高低アクセント、フレーズ、響きなどという捉えをしています。

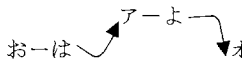
1 おはよう(6~7ページ)


お
は
よ
う

お
は
よ
う

見開きいっぱい朝の教室の様子が描かれ、「おはよう」の文字が2カ所に見えます。ここでは、互いに呼びかけあって多様な「おはよう」の表現を楽しむことができます。

「おはよう」は、「おはよう」の高低アクセントを持ちますが、これを基本型としながら、おーはーよー、オ・ハ・ヨー、オハヨ、音高の高い「おはよう」低い「おはよう」、長い「おはよう」短い「おはよう」など、子どもの感じ方を生かした挨拶をするなどの活動が考えられます。

おーは  アーよ オー
 おーは といった言い方からは、歌舞伎のせりふに出てくるような言い回しや民謡の節回しなどに見られる「産み字」⁵⁾に通じる表現が生まれます。こうした時に自然に生まれる息づかいやひと息の勢いは、図のように

 といったフレーズの構造やエネルギーの流れを生み出しますが、これはすでに相撲の呼び出しをはじめ追分節や尺八本曲に代表されるような「自由リズム」の原初的な現れであり、日本の伝統音楽にとってきわめて重要な表現方法なのです。

「おはよう」に「ソラ」⁶⁾といった音の上下関係を当てはめると歌になります。先ほどの高低アクセントに素直に従えば、おはよう（ソララー）となりますが、おはよう（ラソラー）でもいいですね。リズムを変えて、おーはよ（ラーソラ）といった変奏もできます。子どもはいろいろな表現をしてくれることでしょう。

2 うたに あわせて あいうえお (12~15ページ)

あかるい
あさひだ
あいうえお

いい こと
いろいろ
あいうえお

うたごえ
うきうき
あいうえお

えがおで
えんそく
あいうえお

おいしい
おむすび
あいうえお

ことばのリズムと「あいうえお」の明るい響きが印象的なページです。ここでは、ことばをリズムにのせていろいろな表現をしてみましょう。手拍子や手打ち、あるいは首を上下に振るなどの身体の動きを取り入れてことばを発すると、リズムをいっそう感じ取ることができます。●のところで拍をとってみてください。○は休符にあたります。

・ 4 音節 1 拍

あかるいあさひだあいうえお

● ● ● ●

・ 2 音節 1 拍

あかるいあさひだあいうえお

● ● ● ● ● ● ● ○

・ 1 音節 1 拍

あかるいあさひだあいうえお

●●●●●●●●●●●●●●●●○●○●○●

・ 1 音節ずつのばす。

能の謡の拍節法一種である「大ノリ」のようになります。また、「あかるい」の「あ」、「あさひだ」の「あ」、「あいうえお」の「あ」をわざと半拍遅れて入ったりするとともに味がでできます。

あーかーるーいーあーさーひーだーあーいーうーえーおー

● ○ ● ○ ●

こうした表現につながる伝統音楽の典型例として、能「船弁慶」の次の詞章をあげておきます。

子方「その時義経。少しも騒がず。」

地謡「その時義経。少しも騒がず。打物抜き持ち。現（うつつ）の人に。向（むこ）ふが如く。言葉を交はし。」

・ はずむような日本的な付点のリズムで歌う。

「あんたがたどこさ」のようなリズムで歌います。

あーかーるーいーあーさーひーだーあーいーうーえーおー

● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ○ ●

これらに「ヤー」「ハー」「ハイ」「ソーレ」などのかけ声を入れると、音楽が生き生きとってきます。また、わらべ歌のような感じの「ふし」を付けてみます。子どもが普段遊んで知っているもののがいいでしょう。例えば、遊びのグループ分けをするときの次のような歌がありますが、

グットン バー ぞ わ かれ ま しよ

このメロディを当てはめてみましょう。

あ かる い あ さ ひ だ あ い う え お

歌が生まれました。

別な感じで、4度の動きを基本として謡曲風にすると、例えば次のようになります。



3 あめ いす うし えき おけ (16~17ページ)

あめ いす うし えき おけ
 あり いるか うみ えほん おに
 あひる いのしし うちわ えんとつ おの

ここでは、ことばのリズム、特に付加されるリズムのおもしろさを体感できます。上に並べられた「あめ」から「おの」までの単語を連続して読み上げてみて下さい。1音節1拍を基本とした場合、「あめ、いす、うし、えき、おけ」はそれぞれ2音節2拍がひとまとまりとなり規則的な拍のまとまりが生まれます。

| あめ | いす | うし | えき | おけ |
 | ●● | ●● | ●● | ●● | ●● | 2 + 2 + 2 + 2 + 2

ところが、「あり、いるか、うみ、えほん、おに」となると「あり」は2拍、「いるか」は3拍のまとまりです。

| あり | いるか | うみ | えほん | おに |
 | ●● | ●●● | ●● | ●●● | ●● | 2 + 3 + 2 + 3 + 2

というように、拍が付加されていきます。さらに次の「あひる、いのしし、うちわ、えんとつ、おの」では、

| あひる | いのしし | うちわ | えんとつ | おの |
 | ●●● | ●●●● | ●●● | ●●●● | ●● | 3 + 4 + 3 + 4 + 2

といったように、拍のまとまりは次々とつながられ変化していきます。そして、結果的には、次のようなリズムフレーズが登場します。これがとてもおもしろい。例えば全員で机を叩いて拍をとりながら、始めはゆっくり、そして回数を重ねるたびに速度を速めていきます。最後の「おの」でうまく全員の声揃うといい気持ちです。

| あめ | いす | うし | えき | おけ | あり | いるか | うみ | えほん | おに | あひる | いのしし | うちわ | えんとつ | おの |
 | ●● | ●● | ●● | ●● | ●● | ●● ●●● | ●● | ●●● | ●● | ●●● | ●●●● | ●●●● | ●●● | ●●●● | ●● |
 2 + 2 + 2 + 2 + 2 + 2 + 3 + 2 + 3 + 2 + 3 + 4 + 3 + 4 + 2

これと共通する楽しさを持つ遊びを思い出してください。例えば、階段でじゃんけんをして、勝った方が階段を昇ることができるゲームがありますが、「グリコ」(グー)で勝つと「グリコ」は3音節ですから3段、「パイナップル」(パー)で勝つと、「パイナップル」の6音節で6段、「チョコレート」(チョキ)の場合は、「チョコレート」で6音節6段を進みます。「グリコ」「パイナップル」「チョコレート」のそれぞれの拍のまとまりを感じながら遊ぶわけです。

わらべ歌の「あんだがたどこさ」では、このリズムが楽しさを倍増させます。

あんだがたどこさ | ひごさ | ひごどこさ | くまもとさ | くまもとどこさ | せんばさ | せんばやまにはたぬきがおつてさ |

4 +2 +3 +3 +4 +2 +8

こうした例は、日本の伝統音楽にしばしば出現します。例えば、佐渡の鬼太鼓には「デスクデスコデンデンスケデンデン」といった唱歌(しょうが)があります。これを唱えてみてください。この場合次のような拍のまとまりを感じ取ることができます。

| デスコ | デスコ | デンデン | スケデンデン |

3 (or 1) + 3 (or 1) + 4 (or 2) + 6 (or 3)

有名な箏曲「六段の調」の初段冒頭は次のようになっています。

| テーントンシャン (イヤ) | シャシャコーロリチトン | テントンチャン | ~

6 +4 +3

このように、「ことば」にしたがってそのリズムを付加していく体験は、日本の伝統音楽への学習の発展性を考えたとき、とても大切なものとなってきます。

4 かきと かぎ (22ページ~23ページ)

さるの だいじな
かぎの たば。
げんかん うらぐち
まど とだな。
どれが どれだか
わからない。

かき こま さる ふた
かぎ ごま ざる ぶた

ここから出てくるリズムの典型は、仮に楽譜にすると次のようになります。

さるの だいじな かぎのた ば げんかん うらぐち まどとだ
な どれが どれだか わからな い

声に出すことによって自然に生まれ出てくることばのリズムです。このようなことばのリズムは強く意識され、教材となっていますが、例えば、58ページからは8ページにわたって「おむすび ころりん」のお話が登場します。

むかし むかしの はなしだよ。
やまの はたけを たがやして、
おなかが すいた おじいさん。
そろそろ おむすび たべようか。(以下略)

歌舞伎、「白波五人男」の「浜松屋店先の場」では、弁天小僧菊之助のせりふが、七五調のことばのリズムにのって心地よく響きます。

「しらぎゃ言って聞かせやしょう。浜の真砂と五右衛門が歌に残した盗人(ぬすつと)の種は尽きねえ七里が浜、その白浪の夜働き、～」

さて、さきほどの「かきと かぎ」に戻りますが、これにソラ2音によるメロディをつけてみましょう。歌になります。

さるの だいじな かぎのた ば げんかん うらぐち
まどとだ な どれが どれだか わからな い

ランだけでなくミソラのように音階の構成音を増やすと、表現はもっと多様になります。

後半の「かき こま さる ふた」と「かぎ ごま さる ぶた」に注目してみましょう。「き」が「ぎ」、
「こ」が「ご」、「さ」が「ざ」、「ふ」が「ぶ」と濁音に変化しただけで、まったく異なる感覚が生まれます。
こうした語感の違いを楽しみ感じ取ることも大切な学習内容となります。例えば、太鼓の唱歌では「トント
コトン」と「ドンドコドン」では、その質感は違ってきますし、京都の祇園まつりの鉦の唱歌「コンチキチ
ン」では、「コン」と「チ」、「チン」と唱え分けることにより、楽器の奏法まで分かっけてしまいます。「六
段の調」の冒頭で唱歌「テーン」と唱えると、張りつめられた弦がはじかれて、音が減衰していく感覚が
しますが、これは「テーン」の持つ語感を感じ取っているからこそ味わい理解できるものです。小鼓は能でお
馴染みの楽器ですが、その打音には、チ・タ・プ・ボなどの種類があります。「チ」は弱くて高い音、「タ」
は強くて高い音、「プ」は弱くて低い音、「強くて低い音」ですが、それぞれ異なる音色を伴って演奏され
ます。ちなみに27ページには、「はばば」「ひびび」「ほぼほ」といった濁音や半濁音が提示されています
が、「は」「ひ」「ほ」とは違って、「ば」「び」「ぼ」といった濁音や「ば」「び」「ぼ」といった半濁音
を発音する時は、口腔内の息の流れや唇の開閉、密着度により異なる響きが生まれてきます。また、濁音の
場合は、何か雑で破壊的な感覚、半濁音では、小さな粒が飛び出るようなイメージを感じ取ることができま
す。日本語においては、母音や子音でできていることばの発音体感が実体のイメージと一致しているものが
多く、それ故に豊かな擬音語、擬態語の世界を作りだしています。こうした、音の響きのおもしろさや発声
の楽しさを十分に味わうことが大切だと考えます。

5 ねこと ねっこ (27~27ページ)

ねこが いっぴき、
はらっぱ はしる。
ねっこ とびこえ、
ばったと かけっこ。

ねこ まくら ねっこ まっくら ねこ はらっぱ ねっこ なっぱ

促音は、ことばのリズムをいっそうゆたかにします。仮に「ねっこ」や「なっぱ」を繰り返してことばに出すと、跳ねるようなリズムが自然に出てきます。阿波踊りの「エライヤッチャエライヤッチャ」でも同様ですが、日本人が最も親しんでいるリズムの一つです。促音のあるものとなないものを組み合わせるとさらに楽しいリズムが生まれます。

ねこ まくら ねっこ まっくら

ねこ はらっぱ ねっこ なっぱ

これを生かして、簡単な歌にしてみましょう。

ねこが いっぴき はらっぱ はしる

ねっこ とびこえ ばったと かけっこ

6 こえに だして、十まで かぞえましょう (90~91ページ)

一 (いち) 二 (に) ~
一つ 二つ ~
一まい 二まい ~

数を表す漢字やいろいろな数え方の勉強のページです。声に出して読むとそのまま歌になります⁷⁾。



いち にい さん しイ ごオ るく しち はち きゅう じゅう



ひとつ ふたつ みっつ よっつ いっつ



むっつ ななつ やっつ このつ とお

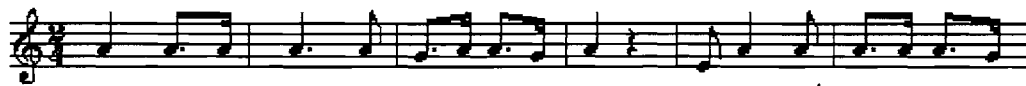


いちまい にまい さんまい よんまい ごまい ろくまい しちまい

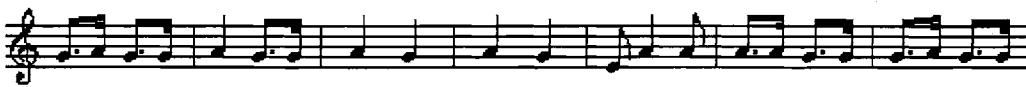


はちまい きゅうまい じゅうまい

先日、体育館で縄跳びをして遊んでいた子どもたちが、次のわらべ歌を歌っていました。



ゆう びん や さーん の おとしもの ひろて あげましょ



いちまい にまい さんまい よんまい ごまい ろくまい しちまい



はちまい きゅうまい じゅうまい ありがとう さん

ちなみに、現在テレビを通して子どもに大人気の「おしりかじり虫」も、こうした「ことば」のもつ音楽的特徴を素直に生かした曲となっています。その意味ではきわめて伝統的であり、曲の骨格に息づく伝統性が人気的一端を担っているということが出来ます。

作詞：うるまでるび

作曲：うるまでるび+松前公高

おしりかじりむし おしりかじりむし

かじってかじって かじってなんぼ かじってなんぼの

(以下つづく)

しょうばいだ

以上の分析をもとに、授業を構成していきます。

IV 授業構成

1 題材 こくごを うたおう

2 題材の目標

ことばの音楽的な特徴を感じ取り、それらを生かして、音楽で表現する。

(注目する「ことばの音楽的な特徴」：ことばの持つリズム、抑揚、高低アクセント、響きなど。)

3 教材

- ・国語教科書教材（『こくご一（上） かざぐるま』（宮地裕他著、光村図書出版）より：「おはよう」（6-7ページ）、「あめ、いす、うし、えき、おけ〜」（17ページ）、「ねこ、はらっぱ」（27ページ）、「あかるいあさひだ」（12-13ページ）、「一（いち）二（に）〜」「一つ 二つ」「一まい 二まい」（90-91ページ）「かぎ、ごま、ざる、ぶた」「はばば、ひびび」（23ページ）、「さるのだいじなかぎのたば」（22ページ）「ねこがいつびき」（26ページ）「はなのみち」（28-35ページ）「おむすびころりん」（58-65ページ）など。
- ・わらべうた：「なべなべそこぬけ」「おちゃらか」「おてらのおしょうさん」「グットンパー」「絵かき歌」「ゆうびんやさん」など。

4 題材の評価規準と具体的評価規準

	ア 音楽への関心・意欲・態度	イ 音楽的な感受や表現の工夫	ウ 表現の技能
題材の評価規準	・ことばの持つ音楽的な特徴を楽しみ、意欲的に表現しようとする。	・ことばの持つ音楽的な特徴を感じ取り、それらを生かしてふしつけや声の表現を工夫することができる。	・ことばの持つ音楽的な特徴を生かして、ふしをつけたり声で表現したりすることができる。

学習活動における具体的評価規準	① ことばのリズム，高低アクセント，抑揚，響きなどを楽しみ，進んで声の表現をしようとしている。	① ことばのリズム，高低アクセント，抑揚，響きなどを感じ取って，それらを生かした表現の工夫をしている。	① ことばのリズム，高低アクセント，抑揚，響きなどを生かし，声で表現することができる。
	② ことばのリズム，高低アクセント，抑揚，響きなどを生かし，楽しくふしづくりをしようとしている。	② ことばのリズム，高低アクセント，抑揚，響きなどを生かして，ソラの音のめぐりをもとにふしづくりを工夫している。	② ことばのリズム，高低アクセント，抑揚，響きなどを生かしてふしをつくり，歌うことができる。

5 全体計画と評価（全3時間）

全3時間の中で、「ことばの持つ音楽的な特徴（ことばの持つリズム，抑揚，高低アクセント，響きなど）を楽しむ。」「歌をまねる。歌をうたう。」「うたをつくる。うたを練る。」といった過程をスパイラルに構成する。

時・過程	活動の発展と教材	評価規準
1 ・ことばの持つ音楽的な特徴を楽しむ。 ・歌をまねる。歌をうたう。 ・うたをつくる。うたを練る。	<p>○わらべうたで遊ぶ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「なべなべそこぬけ」「おちゃらか」「おてらのおしょうさん」などであそぶ。 ○「おはよう」（6-7拍）を様々な形で表現する。 ・おーはーよー，オ・ハ・ヨー，オハヨ，などのように，音高の高い「おはよう」低い「おはよう」，長い「おはよう」短い「おはよう」，ソラの音階にもとづく「おはよう」など，多様な表情をともなって表現する。 ○付加していくリズムや促音が生むリズムの楽しさを味わい，表現する。 ・「あめ，いす，うし，えき，おけ〜」（17拍）につづけてことばを付け足し，生まれるリズムの感じを表現する。 ・「ねこ，はらっば」（27拍）などを読み上げ，促音が生み出すリズムを表現する。 ・「おちゃらか」「なべなべそこぬけ」のふしに倣ってふしづけた「ねこがいつびき」（26拍）の範唱を聴いて真似る。 ○わらべうたのふしをもとに，ソラの音のめぐりを中心としてことばに，ふしをつける。 ・「あかるいあさひだ」（12-13拍）の詩を「おちゃらか」「なべなべそこぬけ」や「おてらのおしょうさん」などのわらべうたをもとに，グループでふしづけをして歌う。 	<p>アー① イー①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・表情や身体の動き，表現の様子を観察 ・リズムの表現や発音の状況を把握 ・グループや個々の工夫の状況を評価
2 ・ことばの持つ音楽的な特徴を楽しむ。	<p>○わらべうたで遊ぶ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「なべなべそこぬけ」「おちゃらか」「おてらのおしょうさん」などであそぶ。 ○十までの数にふしをつけて歌う。 ・「一（いち）二（に）〜」「一つ 二つ」「一まい 二まい」（90-91拍）など，数を数えることばに，ふしをつけて歌う。 ○濁音・半濁音の響きの違いを味わい，表現する。 ・「かき，こま，さる，ふた」と「かぎ，ごま，ざる，ぶた」「はばば，ひびび」（23拍）などの響きの特徴を生かして表現の工夫をし，違いを感じ取る。 	<p>イー① ウー①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・練習や発表の様子を聴取

<ul style="list-style-type: none"> ・歌をまねる。歌をうたう。 ・うたをつくる。うたを練る。 	<ul style="list-style-type: none"> ○言葉のリズムを生かして、声で合わせたり、ソラの音のめぐりを中心にふしをつけたりする。 ・教師の示範による「さるのだいじなかぎのたば」(22ㄱ)を唱えたり歌ったりする。 ○教師が歌う「はなのみち」(28-35ㄱ)を聴き、ソラの音のめぐりに馴れるとともに、ことばが歌になることを確認する。 ○グループに分かれて「おむすびころりん」(58-65ㄱ)のそれぞれの場面に、ソラの音のめぐりを中心としてふしをつくる。 ・最初の場面の教師の示範を聞いて歌う。 ・各場面をグループ毎に分担し、ふしをつくる。 	<ul style="list-style-type: none"> アー② イー② ・教師の示範の聴き取りや模倣の様子を観察 ・練習の様子を聴取 ・グループによる相互の工夫状況を把握
<p>3</p> <ul style="list-style-type: none"> ・うたをつくる。うたを練る。 	<ul style="list-style-type: none"> ○わらべうたで遊ぶ。 ○「おむすびころりん」のふしをつくりあげる。 ・前時につくったグループのふしを確認して歌う。 ○「おむすびころりん」のそれぞれの表現を、グループごとに練り上げる。 ・ことばの意味や内容が伝わるように表現を工夫する。 ○場面をつなげ、「おむすびころりん」を歌で表現する。 	<ul style="list-style-type: none"> イー② ウー② ・練習の様子を観察 ・発表による確認

6 本時の展開 (本時3 / 3)

ア 本時のねらい

「おむすびころりん」の音楽的な特徴を生かしてグループごとにふしづけをし、練り上げて発表する。

イ 展開

学 習 内 容	学 習 活 動	評価規準・評価方法
<ul style="list-style-type: none"> ○ことばと音のめぐり ・わらべうたにおけることばと音のめぐりの関係を実感的に捉える。 ○ことばの音楽的な特徴 ・ことばのリズム、高低アクセント、抑揚、響き、ソラの音のめぐりを感じ取って声で表現する。 ○ことばの音楽的な特徴や日本の音階を生かしたふしづくり ・「おむすびころりん」のことばの音楽的な特徴をいかし、ソラの音のめぐりを中心にふしをつくる。 ○ことばの意味や音楽的な特徴、日本の音階を生かした表現 ・「おむすびころりん」のことばの意味やリズム、高低アクセント、抑揚、響きなどを生かして表現を工夫する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○わらべうたで遊ぶ。 ・「なべなべそこねけ」「おちゃらか」「おてらのおしょうさん」などであそぶ。 ○前時まで学習したことばの音楽を表現する。 ・「おはよう」(6-7ㄱ)「あめ、いす、うし、えき、おけ〜」(17ㄱ)「ねこがいつびき」(26ㄱ)「あかるいあさひだ」(12-13ㄱ)などのことばを表現したり、つくったふしを声に出したりする。 ○「おむすびころりん」の各グループの担当部分のふしをつくりあげる。 ・前時につくったグループのふしを確認して歌う。 ・くりかえし歌って、グループのふしとして覚える。 ○「おむすびころりん」のそれぞれのことばの意味や内容が伝わるように表現を工夫し、グループごとに練り上げる。 ・ことばのリズムや発音を工夫して歌う。 ・身体を動かし、リズムに合わせて歌う。 ・意味や内容が伝わるよう抑揚やふし回しなどを工夫する。 ○場面をつなげ、「おむすびころりん」を歌でつづる。 ・グループごとに順番に発表し、クラスの「おむすびころりん」を仕上げる。 	<ul style="list-style-type: none"> イー② ウー② ・練習の様子を観察 ・発表による確認(首や手などの身体の動き、リズムの取り方、顔の表情、発音の仕方やふしの付け方や歌い方)

V おわりに

「なんだそんなことか、それならいつも国語の授業でやっている」という印象を持たれた方もいらっしゃるのではないのでしょうか。現に、国語の授業では、ことばのリズムを生かして唱える活動など、本稿で説明した内容がかなり盛り込まれています。

しかし、この提案は「コロブスの卵」として理解していただきたい。国語での学習に根底でつながる部分はありますが、音楽の授業として日本の子どもに必要な視点だと考えています。小学校低学年でこうした授業を実践することによって、その後の日本の伝統音楽や民俗音楽の学習にスムーズかつ密接に連続するだけでなく、日本語を母語とすることにより自然に培われている音楽的な感性を分断させることなく育んでいくことができるわけです。小泉文夫の言う「内側にある音楽的な本来の芽を発芽させ育てる」授業を実践することは、音楽科教育に携わる教師の使命だと思います。

注

- 1) 「音楽科，芸術科（音楽）の現状と課題，改善の方向性」中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会配付資料 2006年
- 2) 小泉文夫『子どもの遊びとうた』草思社 1986年 pp.192-193
- 3) ・「『越天楽今様』新たな視点によるアプローチ～小学校6年生における授業の構成」
『新潟大学教育人間科学部紀要第5巻第2号』2003年 pp.135-172
 - ・「ことばからはじめる音楽授業Ⅰ～題材「にほんごは おんがくのすてきなおかあさん（小学校1年生）」の実践から」『新潟大学教育人間科学部紀要第6巻第1号』2003年 pp.105-126
 - ・「作り替えによる歌づくりに着目した学習指導案」
『新潟大学教育人間科学部紀要第9巻第2号』2006年 pp.299-306
 - ・「民謡の教材性と授業プランー長岡甚句を例に」
『新潟大学教育人間科学部紀要附属教育実践総合センター研究紀要第6号』など
- 4) 小泉文夫『音楽の根源にあるもの』1977年 青土社 pp.138-159
- 5) 「ア」「オ」のように伸ばして歌う母音のこと。
- 6) 相対音高です。どの高さから初めてもかまいません。本実践に出てくる階名はすべてそのように理解してください。ちなみに、日本においては、このように2つの音でできているメロディは、伝統的に上の音で終わるといった規則性があります。
- 7) 数の教え方やわらべうたの歌詞や旋律は、個人や地域によって異なります。